聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 90
2023 年 11月

イスラエル軍による難民キャンプ空爆の後、避難する人々。ガザ南部の町ラファにて。

日曜日、ミサに遅れまいと小走りに駅へ走って行った私。途中で躓き、顔面からバッタリ！　こんなひどい転び方は初めてでした。あっ！と思った時は、もう口から出血。どうしよう！　すると3、4人の方がすぐに駆け寄ってきて、ティッシュやタオルを差し出し、救急車まで呼んで下さいました。近くの救急病院で治療。下唇を数針縫うと言われた時は、思わず「麻酔は？」と聞きました。「もちろん！」と言われてやっと安心。ショックから少し落ち着いて見ると、私はなんて幸せ者かと神様に感謝しました。小さな怪我でも、手厚い治療を受けた私。それに比べてガザの人々は？今大勢の人々が家を追われ、飲み水も食べ物も医薬品も手に入りません。病院も標的にされ、手術も暗がりの中で麻酔なし。新生児たちは保育器の中で死んでいきます。避難路では爆撃があり、救急車さえ安全ではありません。

当法人の「平和の架け橋」プロジェクトで来日した青年たちも避難していた教会や自宅が爆撃され、兄弟や親類を殺されました。

「安全な」日本にいる私たちは、彼らのために何ができるのでしょうか！？　皆様、今この瞬間も危機に瀕している人々の命を守るために、どうぞ緊急支援にご協力下さい！

井上 弘子

認定NPO法人
聖地のこどもを支える会
事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502
Email ispalejpn@gmail.com
TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 00180-4-88173 加入者名「NPO法人 聖地のこどもを支える会」
当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。
https://seichi-no-kodomo.org

ガザ、失われる命

現地で何が

ガザを巡る状況は刻々と動くため、最新の情報をお届けすることはできませんが、現地ではどういうことが起きているか、断片的ながらお伝えします。

増え続ける死者、募る人道危機
パレスチナでは

ガザへのイスラエル軍の空爆は続いており、地上侵攻に向けて北部ガザの住民に南部へ避難するよう呼び掛けています。水道、電気の供給は止められ、完全に封鎖され外部からの援助物資の搬入も規制された中、100万人を超える人の移動は人道上の問題になっています。

空爆の影響について、米国の企業が公開したガザ北部の衛星写真によると、今年5月の時点では幾筋もの通りと住宅が密集する市街地の様子が見て取れるのに、10月21日には住宅と通りの境目がわからないほど激しく破壊されているのがわかる映像が、テレビで紹介されていました。子供たちの犠牲も増えているようで、死亡して瓦礫に埋もれた時に身元が分かるようにと子供たちが腕に自分の名前を書いている様子も、映し出されていました。

ガザ地区の死者数は、戦争が始まってから1か月で1万人を超えました。ガザ保健省によると、うち4,500人以上が子どもだといいます。イスラエル軍は地上作戦でガザを南北に分断し、北部での包囲網を狭めています。救急車を爆撃しては、ハマスの戦闘員が乗っていたと言いますが、民間人の死者のほかに戦闘員がいたのか、確認はできません。11月9日、民間人の退避のために1日4時間、戦闘を「休止」すると発表されたものの、医療機関も対象にした攻撃は続いています。ガザ北部の住民は南部へ避難したところで住居、食料などの生活も安全も保証されず、残れば死に直面する地獄の選択しかありません。

暴力の連鎖はヨルダン川西岸にも及び、検問のイスラエル兵に投石するなどの抗議行動から衝突が各地で拡大し、パレスチナ人170人以上が死亡したといいます。この7月と9月、2度にわたって対テロ作戦という名目でイスラエル軍による攻撃を受けた北部の都市ジェニンがまた攻撃され、西岸ではまれな空軍機による爆撃まであったようです。攻撃対象にはイスラム教の礼拝所モスクが含まれ、イスラエル側は武装組織の拠点になっていたとしています。

人質解放小出し、交渉の手札か
イスラエルでは

ハマスに拉致されていた200人余りとみられる人質のうち、2人のイスラエル人女性が解放されました。20日に米国籍の母娘2人が解放されたのに続くものです。「人道的配慮や健康上の理由で解放した」との説明ですが、イスラエル軍の地上侵攻が予想される中で、小出しに解放してイスラエルとの交渉を優位に進めるねらいがあるのではないか、とみられています。ほかにも解放をめぐる交渉があったものの、ハマス側が燃料の補給を要求したのに対し、イスラエル側が軍事利用される可能性があるからと拒否したため、中止になったという報道がありました。

ガザからは、イスラエル軍の猛攻撃にもかかわらず10月末の段階では、イスラエルへ向けてロケット弾が撃ち込まれているということです。イスラエル側は、10月25日以降しきりにガザ地区内で「限定的な」地上作戦を実施と発表。戦車砲で攻撃するなどしてハマスの軍事施設を破壊したといいます。28日には「かつてないほどの火力」を使った空爆で舞い上がる炎の映像が流されていました。さらに、ガザ地区最大の病院が「ハマスの司令部として使われている」として攻撃、電気などが止められて保育器の新生児が何人も死んでいっています。

被害者の歴史をどう生かすか
アメリカでは

ユダヤ系米国人の平和団体が連邦議会議事堂で、パレスチナ人の権利を支持し即時停戦を訴えるデモをしました。その団体の一つ If Not Nowのボルグワルト政治局長は、イスラエルの国防相がパレスチナ人を「人間のような動物」と形容し、軍に「ガザの完全包囲」を命じたことに触れて、「その言葉が行き着く先を私たちはよく知っている。彼らが意図しているジェノサイド（集団殺害）を阻止する必要がある」と表明しました。CNNの報道です。ボルグワルト氏は「祖先がホロコーストを経験したユダヤ人」として発言しています。イスラエルでは、被害者としての歴史を背景に「だから治安第一」と言い、自衛の範囲を超えているとしかいえない過剰な武力行使を正当化しがちです。それに対して「被害者だからこそ自分たちが受けた仕打ちを他者にしてはいけない」「ユダヤ人の安全のためにパレスチナ人を犠牲にすべきだとはならない」と言っているのです。

10月19日には、聖ポルフィリウス教会が空爆され、一般市民20名近くが犠牲となった。

同じ爆撃で犠牲となった3兄妹 ： 聖家族学校の小学生、中学生
左からマジド・アル・サワリ、ジュリー・アル・サワリ、スヘイル・アル・サワリ

当法人の活動がメディアで紹介されました

当法人理事長の井上弘子がNHK「おはよう日本」10月19日、26日、11月9日に出演。インタビューに答えて、紛争地での教育の大切さについて語りました。（上記のQRで閲覧できます）新聞記事では、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、共同通信などで報道されました。

ひと

「女性に学問はいらない」という父に隠れて勉強し、大学に進んだ。英文学を学び、キリスト教に関心を持った。卒論で「神はいない」と証明しようとしたが、できなかった。「神様に負けた」。22歳で洗礼を受けた。

転機は50歳のころ。パレスチナでの巡礼者向けのツアー中、裸足の子どもがキーホルダーを売りに来た。教育こそが平和への確かな道だと、1990年に基金を設立。後に認定NPO法人「聖地のこどもを支える会」になった。

2005年、紛争の続くイスラエルとパレスチナ、日本の若者が共同生活をしながら、対話を重ねるプロジェクトを始めた。東日本大震災後は、岩手県に毎夏泊まり込んでボランティアを続けた。

長い迫害の歴史を経て建国を果たしたイスラエル。それにより故郷を奪われ、占領が続くパレスチナ。話す機会がなかった若者の間で口論になることもある。でも、共に生活する中で苦しみや恐怖を分かち合い、「あなたもつらかったね」と抱き合って涙を流す。「みんな同じ人間で友だち」と語りかけてきた。

これまで400人以上が参加し、この夏も15人が共に過ごした。約1カ月後、大規模な軍事衝突が始まった。私たちの活動は何だったか。若者たちと連絡を取り合い、一人ひとりを思って祈らない日はない。それでも、信じている。「心にまかれた平和の種は、いつか必ず花が咲く」と。

文・写真 川野由起

イスラエル・パレスチナ・日本の若者同士の対話を続ける
井上 弘子（いのうえ ひろこ）さん(84)

朝日新聞10月18日付の記事

ガザの人々へ 緊急の支援を、あなたも

イスラエル軍による無差別攻撃によって命の危機にある人々をまず救うため、当法人では「ガザ緊急人道支援」を行います。皆様のあたたかいご支援をお願いいたします。

クレジットカードによる支援

聖地のこども 検索

郵便振替による支援

NPO法人 聖地のこどもを支える会

00180-4-88173

上記以外の支援方法は当法人までお問い合わせください。tel. 03-6908-6571

支援金は、エルサレム・ラテン大主教区（カトリック教会）人道支援事務局を通じて、ガザで命の危機に見舞われる人々、特に子どもたちのために役立てられます。

エルサレム・ラテン大主教区は、ガザでは教会の他に複数の学校、病院、福祉施設を持っており、さまざまな宗教や人種の家族が避難しています。支援金は主に食料や医薬品など、避難生活に欠かせない物資の購入に充てられます。

すべての人へのアピール
（抜粋）

エルサレム・カトリック大主教区 枢機卿
ピエルバティスタ・ピッツァバッラ

私たちはいつも貧しい人々の叫びに耳を傾け、それに応えてきました。今再び、その叫びは聖地に響いています。10月7日に始まった戦争が激しさを増しているからです。（中略）憎しみが刻まれたこの社会に、信頼と希望と愛の種を蒔くために、具体的な変化とふさわしい環境を築くことができるよう、私たちをお助けください。

（アピール全文はこのたび同封の教育支援パンフレットの裏表紙にあります。）

エルサレム・ラテン大主教区人道支援事務局のロゴマーク。右側の写真は聖墳墓教会。ドームの真下にイエス・キリストの墓がある

懐かしい日本の皆様、
一人でも多くの子どもを
救うためにご支援を
お願いいたします。

ヤクーブ・ガザウィ
（当法人現地スタッフ・オルガニスト）

仲間たちの消息

（理事長・井上弘子）

今夏日本での「平和の架け橋プロジェクト」を終え、イスラエルへ、パレスチナへと無事帰国した仲間たちは、突然ハマスの攻撃で始まった非常事態に直面しています。とにかく無事を確かめたくて、一人一人にメールや電話で連絡を試みました。返信もなく様子がわからない人もいましたが、何人かとのやり取りで得た消息をお伝えします。

目の前で姪が、愛する人が殺された

空爆にさらされて一番心配だったガザのハデルは、10月下旬に無事が確認できました。電力を断たれたそうですが、その時はスマホの充電はできていました。しかし避難命令が出ても、病気の父親のため自宅にとどまらざるを得ませんでした。彼とはほぼ毎日メッセージをやり取り。時には自宅前の瓦礫と化した建物の様子や、始めは遠かった爆発音がだんだんと近づいて大音響となる音、爆撃の閃光とビル2棟が崩れ落ちる動画などを送ってくれました。彼のメッセージをいくつかご紹介します。

「弘子さん、今僕は、《ヒロシマ》をライブで体験しています！ガザに今まで落とされた爆弾の熱量はすでにヒロシマの原爆と同じだとか！」10月25日

「この虐殺が今すぐストップしますように！！！弘子さん、どこにも安全なところはありません！世界最古の教会さえ爆撃されました。ラミや他のクリスチャンの友だちが生き延びることができますように！僕もクリスチャンの親友を亡くしました。」10月31日

「ありがとう、弘子さん、あなたの支えで僕は生き残ることができるでしょう。あなたの祈りでこの虐殺は終わるでしょう！」11月5日

この日からWIFIが全く使えなくなり、連絡は途絶えました。とても心配していたところ、エルサレムの矢加部真怜さん*からハデルの様子が伝えられてきました。

「イスラエル軍の戦車が近所に押し寄せて来て、空爆もかつてないほど激化しています。」11月7日

「彼の自宅は破壊されましたが、家族ともに無事だそうです。」11月11日

「昨日、目の前で姪っ子と妹の旦那さんが殺されてしまいました。ハデル自身と奥さん、両親は無事です。」11月13日

一方、2018年の「プロジェクト」にガザから参加したラミとも連絡できました。プロジェクトで来日したことを知ったＮＨＫがオンラインでインタビューしたものが、10月26日朝の「おはよう日本」で顔と名前を伏せて放映されました。その中でラミは「悪夢のよう。街はゴーストタウンだ。曜日も時刻もわからない」と述べ、キリスト教の教会に避難していたこと、400人ほどがいたその教会が空爆を受け、自分の親族を含む10人以上が亡くなったことを話しました。また、イスラエル軍がまいたチラシに「南部へ避難しない者はテロリストの仲間と見なす可能性がある」とアラビア語で書かれているのを見せて、「勧告のことは知っているが、ガザ南部も安全でなく居場所もない」と言い、「平和な場所に住みたい」と悲痛な声をあげていました。

ガザの友を気遣うイスラエル人

2019年に来日し今回も参加したパレスチナ人ダリーヌは、平和とは真逆の事態に打ちひしがれています。同様に19年、今回と続けて参加し、ダリーヌとの交流を続けているイスラエル人タルは、お腹に赤ちゃんを抱えながら元気にしているようです。17年にイスラエルから参加のイムリ、その紹介でプロジェクトに参加することになったルイとマタネルの3人とオンラインで話をしました。その中でマタネルは、軍隊に行くと言いました。友達の父親がハマスに殺害されたとか、「イスラエルのために戦わざるを得ない」とのことでした。今までの参加者の中から何人も軍隊に行っているはず、とても心配です。

もう1人のイスラエル人、アンディにも様子を尋ねたところ、「ガザのハデルともメールで連絡を取っている。だって、彼は友だちだから」と。ハデルにとって、どんなに励みになることでしょう！初めは結構楽観的だったアンディは事態が深刻化するにつれて、「今は話したくない。あまりにも傷が深すぎる。」と言ってメディア取材に応じないのですが、「一刻も早く停戦を！どちらの側にも、特に子どもたちにこれ以上の犠牲者を出さないで！」と訴えています。

＊矢加部真怜：2014年に当NPOのスタディ・ツアーに参加し、現在認定NPOピースウィンズ・ジャパンのエルサレム駐在スタッフ。開戦後も、東エルサレムにとどまり、ガザ地区の緊急支援に従事。ハデルはピースウィンズのガザ・スタッフ。

プロジェクトOB・OG、ヤクーブを囲んで

「平和の架け橋」プロジェクトのOB/OGたちにとって、せっかく友だちになったイスラエルとパレスチナの人々が激しく衝突している。そして増え続ける犠牲者。つらい現実を前に、自分たちに一体何ができるか。OB/OGからの提案で11月4日、ともかく「ヤクーブと共に話す会」を開催、15名が参加した。エルサレムにいる現地スタッフのヤクーブもオンラインで加わった。

現在のエルサレムの状況は？

ヤクーブ：「イスラエルは西岸を完全に封鎖しています。150人の教員のみがエルサレムに来ることができますが、それ以外の西岸地区から出稼ぎに来ていたパレスチナ人は仕事を失っています。イスラエルはその代わりに12万人の労働者をインドやタイ、シンガポールなどから入れるようです。私は、教会事務所と自宅との間を行き来する以外はどこにも行けません。西岸地区では毎日衝突が起きており、すでに170人以上人が殺され、800人以上が逮捕されています。街を歩いていると、イスラエル警察に呼び止められ、携帯電話をチェックされるのです。戦争に関することや、イスラエル批判を投稿していると逮捕されます。新しい法律ができて、イスラエルに気に入らないことを喋れば、イスラエル国籍のアラブ人はパスポートを取り上げられます。監視されている私たちはもう何も言えないのです。この国を去ろうとするアラブ人も多く、すでに100家族が準備しています。」

心境はどうでしょうか？

ヤクーブ：「自身パラノイアの様な状態で、TVやSNSの映像はもう見たくない。この間は、車を運転していたら、200mほど後ろに着弾してものすごい爆発音がしました。サイレンを聞くたびに恐ろしくて狂いそうになります。テルアビブには、シェルターがありますが、エルサレムにはそのようなものはないです。私は以前から、この聖地での戦いは世界とつながっていると言ってきました。ネタニヤフはもともとイランをやっつけたくて仕方なかったわけですし、アメリカは、兵士20,000人を投入しようとしている。世界大戦にならないか心配です。」

戦争はどうすれば終わるのでしょうか？

ヤクーブ：「イスラエルは、誰の言うことも聞きません。唯一、人々（民衆？）の力でしか終わらせることはできないでしょう。例えば戦争反対のデモが世界に広がると影響があると思います。でもわかりません。ともかく、祈ってください。」

参加したOB、OGの感想

ヤクーブの顔を見て声を聞くことができてよかったです。ただ、言葉には表せない痛みを感じているように思います。 自分自身が日々感じている無力感や憤り、悲しみについても、イスラエル、パレスチナ、日本の3者ともに時間を過ごした経験があるみなさんだからこそ、率直に分かち合えた気がします。（**川野由起**）

報道される以上の、生の声を聴いて心がとても痛みました。即時停戦を求めると共に、精神的にダメージを負った友人のために何ができるのかを考え、行動していきたいです。（**山崎みず穂**）

ガザの惨状を日々ニュースで目にする一方で、イスラエルでは、もの言えぬ閉塞感が広がっている事実を知り、改めて当問題の複雑さを痛感しました。微力ながら自分に出来る事を探していきたいと思います。（**今村錬**）

自分に何ができるのか自問自答する日々ですが、現地の人々が安全面の理由でSNSへの投稿や集会を行えないことを知り、意思表示ができる環境下にいる自分たちが沈黙を続けていてはいけないなと思いました。（**高橋彩子**）

現実的な解決策が見えないなか、当事者は、ただ必死に迫りくる試練に立ち向かっているのだと痛感しました。 そうした現実を突きつけられてもなお「何もしない」という選択をしている自分に、日本人として恥を感じました。（**鵜飼恵子**）

国家の必要に迫られ個人の人権が侵害されている具体例を直接聞いたことにより、違和感と閉塞感が増大しました。あまりに小さな力ではあるものの、署名、募金、励ましの言葉を友人にかけるなど、身近なところでの貢献を欠かさずにいようと思いました。（**中根杏**）

対立の原点に立ち返ることからしか 和平はない

村上 宏一（当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

ひどいことになりました。イスラム教原理主義組織ハマスによるイスラエル攻撃に端を発した戦争は、パレスチナ、イスラエル双方におびただしい死者を出し、今はガザのパレスチナ住民にどれだけの犠牲者が出るのか懸念が強まる状況です。この「オリーブの木」が皆さまのお手元に届くころはどんな事態が起きているか、予測することはできないし、する意味もありません。今は、このような戦争をもたらすイスラエル・パレスチナ紛争の元にあるもの、押さえておくべきことは何かを、改めて考えましょう。

「治安最優先」の主張を後押し

ハマスがイスラエル領に向け何千発ものロケット弾を発射し、越境攻撃を仕掛けた10月7日はユダヤ教の安息日（シャバット）で、宗教上の祝日と重なって連休でした。この休日に、ガザとの境界から約6㌔の集落郊外で開かれていた野外音楽イベントの会場を、トラックやオートバイに乗ったハマスの戦闘員が急襲。270人を射殺したり逃げようとした車ごと焼き殺したりしたほか、多数の人質を拉致しました。

また、ガザから約5㌔の協同体キブツ・ベエリでの惨状を、朝日新聞のエルサレム特派員が報告しています。2週間後に公開されて現地入りし、見聞きしたものです。「家々の壁や窓ガラスには無数の弾痕や砲撃の跡が残り、大量の血しぶきで黒くなった布団が打ち捨てられていた」と描写しています。ハマスの戦闘員は各家に乱入しては住民を撃ち殺し、遺体には切り刻んだり焼いたりした痕があったということです。また、ここでも多数が人質として連れ去られたといいます。

ハマスがガザ地区内からロケット弾をイスラエルの市街地にまで撃ち込み、死者が出ることはありましたが、境界の障壁を打ち破って越境攻撃を仕掛け、残虐な殺害や人質の拉致という行為を見せつけたことは、世界中に衝撃を与えました。それは、ハマス＝テロリストという決めつけを裏打ちするようなものでした。イスラエルは「自国民を守るため」と言えば何でも許されるかのように、時には自衛の度を超える武力行使をする「治安最優先」の政策をとっています。今回のハマスの行為は、イスラエル側に「それ見たことか。これだからパレスチナ人には治安第一で臨まなければならないのだ」という主張が証明されたと言わせるものでした。そして、ハマスとは関係のない住民までがテロ封じの名目で戦争に巻き込まれるのです。イスラエルに一泡吹かせたつもりでも、何倍もの報復を受けることになり、民間パレスチナ人にさらに多数の犠牲者が出るのは目に見えています。

たまっていた不満のマグマ？

11月上旬の段階で進行しているのは何でしょう。それはもはや、ハマスの残虐行為の印象を薄れさせるほどの、イスラエル軍によるガザへの空爆、地上軍による破壊作戦です。ガザ市や難民キャンプをはじめ北部には瓦礫の平地が広がり、イスラエル、パレスチナ双方合わせての死者は1万人を超えて増え続けていますが、いまや増えるのは一方的にパレスチナ人の数です。

イスラエルのガラント国防相は、ハマスを「ナチス」と呼び、ガザの完全包囲を命じました。ハマスを、ユダヤ人を虐殺したナチスと同じであり、せん滅すべきであると宣言し、そのために「民間人に多少の犠牲が出るのはやむを得ない」と公言しています。では「多少」というのはどのくらいなのでしょう。「1万人ぐらいは仕方ない、10万人にもなるとまずい」とでもいうのでしょうか。国防相の発言は、そう問い詰めたくなる性質のものです。

オスロ合意でわずかな自治を与えられただけで、イスラエルにより行動の自由などを制限され、尊厳を奪われていると感じているパレスチナ人をよそに、アラブ同胞はアラブとイスラム教の盟主を自認するサウジアラビアでさえイスラエルとの関係正常化を探っているとみられる状況です。それに対し警告を発したというハマスの言い分には、テロ行為で非難される立場にある者が言えたことか、と思わせられますが、アラブ諸国には、後ろめたさもあって効果はあるようで、思い出したようにパレスチナとの連帯を表明する首長もいました。

確かにガザだけを見ても、よく言われるように365平方㎞、東京23区の6割ほどの面積に200

万人以上が住む超過密地域。イスラエルとの境界は電流柵やコンクリートの高い壁で完全に囲われ、西側の海はイスラエル海軍が監視の目を光らせています。空からの出入りは、1998年11月に空港が開設され、翌月に最初のフライトを迎えた時の取材では、海外とつながる夢を膨らませる人々を見たものです。それも、イスラエルへの抵抗運動第2次インティファーダが激化すると、2002年1月に滑走路がイスラエルにより完全に破壊されて、以来使われていません。ガザは出入りの自由がない「天井のない刑務所」になったのです。

このようなガザの窮状。そしてヨルダン川西岸自治区でも、ユダヤ人入植地が次々と拡大し、占領状態に反発する若者の間に武力闘争への動きが出てくるとイスラエル軍による武力行使で死者が出るなど、パレスチナ側の閉塞感が強まっています。今年、4年ぶりに当NPOが実施した平和の架け橋プロジェクトでは、パレスチナ人参加者からの「イスラエルによる占領状態に対する非難」の声がいつになく激しく、平和のメッセージをまとめることができませんでした。イスラエル、パレスチナの若者を日本で交流させるこのプロジェクトでは、毎回激論はあっても、共同生活をしながら交流を深める中で、和解のきっかけをつかんできました。今回、友情を築く例が少なかったのは、不満のマグマが大きくなっていたからなのでしょうか。

生存権の保証どちらにも必要

ハマスによる一時的な「大攻勢」に快哉を叫ぶパレスチナ人もいたかもしれません。とはいえ、すぐに悲惨な現実を目にすることになり、武力によって勝ち取れるものはないと思い知らされました。だからといってイスラエル側にしても、武力で抑え続ければいいというものではありません。ハマスを叩き潰しても、治安優先を旗印にパレスチナ人を力で抑え込み続けるなら、頭を地面に押しつけられる屈辱、土地を奪われたり家を壊されたりという生活上の苦しみが、恨みや憎悪を膨らませ、いずれ爆発します。それをなくす一つの方法は、自分たちを憎悪するパレスチナ人を根絶やしにすることです。ジェノサイド（大量虐殺）の対象にされた歴史を持つユダヤ人が、まさか同様のことをするわけはないはずですが、ガザでの作戦はこのまま続くと、それに近いことを狙っていると受け取られかねません。

そんな選択を避けるには、憎悪のもとになるものを断つしかありません。それには、パレスチナ人の生存権と尊厳を保証する「ホームランド」をつくり、イスラエルとの二国家共存を目指すほかないでしょう。第2次世界大戦後、ナチスによる悲劇を味わったユダヤ人の生存権を保証するための「ホームランド」として、イスラエルが建国されました。問題は、それがパレスチナ人の生存権の制約の上に成り立ったということであり、それが対立・紛争の原点です。その解消策は、パレスチナ人にもホームランドを持たせることではないでしょうか。そのためには、さまざまな課題があります。何より、今はハマスのテロで激高しているイスラエル人に、和平の話を聞く耳はないでしょう。ならば、為政者が長い目で見て永続する和平を追求する責務を負うべきです。

イスラエル・パレスチナ紛争の歴史を学び、イスラエルにテロなどの攻撃を続けていたパレスチナ解放機構（PLO）との和平交渉に道をつけたのが、故ラビン首相でした。猛反発を受けるに決まっていることを敢えてするのは勇気のいることです。その勇気を持てる指導者が、イスラエルにも、パレスチナ側にも必要です。

世界的に有名な歴史学者のユヴァル・ノア・ハラリ氏は、民放テレビのインタビューで「“苦しみの海”にのまれている人々は、他人の苦しみと共感することができなくなってしまいます」と述べ、自身がイスラエル人であるために今は客観的になることができないと断りつつ、人々は何事も「被害者か加害者の二択で考えがちですが、どちらかが『絶対的な正義』で、もう片方が『絶対悪』だと思い込まないようにすべきです」と言っています。そして「未来に目を向け、平和のための方法を見つける必要があります。現時点では、ほぼ不可能に見えますが、長い目で見れば不可能ではないと思います。というのも80年前、ユダヤ人は、ドイツのナチスによって何百万人も虐殺されました。そして、今日、ドイツ人とユダヤ人の関係は良好です」という希望の言葉を残しています。

ガザ空爆の現実

家から間近に見える場所を爆撃。この後ビル３軒が崩れ落ちる。（ハデルの家から）

今年夏、「平和の架け橋プロジェクト」の一コマ

2023年「平和の架け橋プロジェクト」のイスラエル･パレスチナ･日本の参加者。初めての浴衣を着てみんな大喜び！　信州善光寺の山門前で。（今回の軍事衝突のわずか2カ月前！）

空爆で完全に破壊された町。（ハデルの家から）

ギリシャ聖教会の爆撃で大勢の人が亡くなった。

ひどい破壊に戸惑う人々。

人影のないベツレヘムの町

ベツレヘム北部の検問所付近。左奥に「分離の壁」が見える。

キリストが生まれた聖誕教会の正面。普段は大勢の巡礼者でにぎわっている。

写真撮影　ハデル･アルスラニ、ラミ･アルジェルダ、ラハド･シオ、中山夕里亜